TOYOTA 5大陸走破 Asia 2019-2020

01

Jeddah → Abha

緊張感のある、タフな喧騒。

サウジアラビアのジェッダの空港からホテルへと向かうバスの中で、すでに喧騒に目を奪われていた。ウィンカーも出さずにいきなり割り込んでくる前方車両に思わず腰が浮きそうになり、車間距離の近さに声が出てしまう。走破メンバーの表情には明らかに緊張が見える。トヨタ車、あるいはLEXUS車が多く走っていることに気づくと同時に、その新しいクルマたちの多くに凹みや傷があることが気になってしまう。日本人のイメージする“砂漠と石油の国”は、タフな運転が要求される街だった。

キャプテンの鈴木は、「緊張感のあるスタートでした」と、中東走破の始まりを振り返る。最終的な許可が下りずに日本人がステアリングを握ることができない状況には残念な気持ちを残しつつ、都市部の混沌は「いつ事故が起きてもおかしくない」という。渋滞しているなと思ったら、前方に大きな事故が起こっていたこともしばしば。だからこそ、安全第一という意識を浸透させていく。鈴木は言う。

「もちろん安全が最優先事項です。ただ、5大陸走破という大きなプロジェクトをうまく仕事に活用していきたいというのが本音です。日常の業務ではなかなかクルマに反映しづらい小さな声を、このプロジェクトを使って届けるということ。その改善の“素”となるようなものをきちんと持ち帰りたいと思ってます」

アラビア文字で書かれた道路標識の数字を覚えるところから走破は始まった。

スケールの大きな風景。

スタートイベントを終えてジェッダの喧騒から離れると、交通量は明らかに減り、ダイナミックな風景が現れる。長いワインディングが続く上り坂。EHV 電力変換ユニット設計部の佐藤は、初めてのサウジアラビアの印象について「風景のスケールが大きいですよね。長い時間をかけて大きく曲がりながら登って、長く下るっていうようなワインディングは日本にはあまりないと思います」と語った。砂漠ではなく、サウジアラビアの中でも珍しいという山岳路は、3000m を超える地点に達した。

標高が高くなるほど、横風が強くなり、霧が濃くなってくる。後部座席から凄腕技能養成部の関谷が、運転するローカルメンバーのアブドゥルに、横風に対しての LC200 の感触を尋ねる。問題ないという答えを聞きつつ、ではブレーキフィーリングは？加速については？アメリカ仕様に味付けされている AVALON は？と、ローカルの感覚を取り込んでいく。クルマに対する感覚の微差を調整していくことが、その土地に合わせたクルマを作ることでもある。短い滞在の間に、何度も質問を重ねる。

想像をあっさり覆す、強風と霧。

ハイオクが1リッターあたり約 60 円、レギュラーが 40 円という、日本人の感覚からすれば驚くほどの安さだが、これでも 2018 年にガソリン価格が 2 倍になったのだという。その高騰を受けて、少しずつハイブリッドの需要が高まっていること。けれどもあくまで都市部の現象であり、山岳地帯に入るほどにタフで修理しやすいクルマが残っていること。

GRカンパニーEVPの定方は語る。

「走破に参加するたびに痛感するのは、求められるクルマが変化するということ。時代、環境、街と郊外、あらゆる要因が関連しますね。そのためには現地を走る必要が絶対にある。まさかサウジアラビアで霧に包まれるなんて、想像もしていなかったからね」

中東の画一的なイメージは、わずか 2 日間のサウジアラビア走破で覆された。霧に包まれて視界はほぼホワイトアウトしながら、ローカルのアブドゥルは「砂嵐もほとんど同じだよ。きっとこれから先の走破で出会うことになると思うけど」と言った。

距離：788km
期間：2019.2.19-21
日数：3日間
車両：Land Cruiser 200、Prado、Camry Hybrid、Prius、Avalon